「夢や目標を意識付ける勉強法が、より高き『楽しい！』『わかった！』へ導いていきます。」

ペガサスプランニング社長　田中　俊英

「一クラス三人制」「繰り返し学習」というユニークな特徴で全国的に成長している学習塾がある。
画期的なオリジナル学習ソフトを武器に、全国FC展開で日本の教育マーケットに切り込む気鋭のベンチャー起業家に直撃――。

ベンチャー精神と学習塾の拡大期

――まず経歴からお聞かせ下さい。生まれは一九五四年、昭和二十九年ですね。

田中　はい、いま五十六歳です。福岡県糟屋郡にある志免という町に生まれました。炭鉱町でした。実家は香椎にあります。

修猷館から九大に入り、卒業して、とりあえず大手家電量販店に勤めましたが、やはり私は昔から自分自身で事業をやりたいという気持ちが強くあり、退社の道を選びました。

独立の道を果たす上で私が選んだ道は、学生時代に時間を忘れて没頭できた、教育の世界でした。そこで私はある学習塾で先生をすることにしたのです。

そして私は当時としては斬新な切り口の教育の形である「一クラス三人制」「繰り返し教育」発見し、本格的に独立の決意を固めることとなりました。

当時の塾は少人数制を謳っていながら一クラス二十人ぐらいで指導をしていました。

これでは少人数制とは言えないのではないか？更にはアルバイトの先生を使っていること自体にも疑問を感じていたのです。

私は夢を持つ教育のプロとして常に生徒と向い合っていましたが、子どもとのコミュニケーションとやる気を引き出すには五名ぐらいが限界であると強く感じていたのです。

大人数で学校と同じような、とおり一辺倒の授業しか行わない塾の教育方法では、子どもの「できる」を体感させてあげることができないと気付いた私は、自分でプリントを作り、繰り返して何度も何度も同じ問題を解かせる現在の「繰り返し教育」の原点を発見しました。

この「繰り返し教育」で皆ができるようになってから、生徒を帰宅させるようにしたのです。

そのような経緯もあり、当時まだ二十六歳の人間が独立するなんて、周りから見れば無謀とも言われてしまうような時代でしたが、私の自分で事業をしたいという強い信念と、当時の教育方法への挑戦心が相俟っていよいよ独立開業への道を選ばせて頂きました。

――どうして独立できたのですか。

田中　まずは私自身に強い信念があったからだと思います。先ほどもお話をしましたが、当時の教育への挑戦心と私のやり方に対して強い成功の確信を持っていたからだと思います。そして何より当時塾講師をやっている間、私を信じ私に子どもを預けてくれる周囲の方々に恵まれたことが大きな要因でした。

当時教室といってもマンションの一室を借りて行うような状態でしたから、生徒が増えるにつれて部屋が足りなくなった時などに、「うちを使ってよ」と声をかけてくれる方もいらっしゃいました。

――ありがたい話ですね。

田中　その時は本当にうれしかったですし、その時のことは今も大変感謝をしております。

生徒の数も増えて、部屋を貸してくれた方々にもお返しができるようになり、三年の月日が経ち、生徒数も二百名を数えるまでになりました。

そのころから教室と事務所を借りて拡大期に入っていく過程で従業員も採用することになりました。

たなか・としひで
1954年福岡生まれ。県立修猷館高等学校卒、九州大學農学部卒。26歳のとき、少人数制の学習塾を起業、現在に至る。

FC展開そして独自ソフトの普及へ

――応募する子どもが多かったのは、生徒も成績が上がったからですね。

田中　はい。しかし、反省すべき点も多かったと今は感じています。繰り返しになるかもしれませんが、私たちは昭和五十五年に個人指導塾（旧ペガサス）を設立しました。個人指導にこだわったのは、当時あまりにも多くの子どもが、大教室の中で「落ちこぼれ」になっていたためでした。一人も落ちこぼれを出さないためには、それぞれの子どものペースで、それぞれの進度に合わせて指導していく必要がある。それが当時の、そして今も変わらない私たちの信念です。

しかし、個人指導「繰り返し教育」という方針は正しくてもこのアプローチは諸刃の剣のようなもので、「教え込み」から子どもの依頼心が拡大し、自ら物事を学び取って行こうとする力を奪う危険性を伴っていたのです。

個人指導をしながらも、子どもの「自立学習」能力を培っていくにはどうしたらよいか？当時はまだ気付けなかったと今では反省しています。しかしながら、当時としては斬新な「一クラス三人制」「繰り返し教育」ですが、幸いにも世間に受け入れられ、生徒も四、五百名になっていきました。

しかし、実はこの頃、アルバイト講師の採用と塾長制度に強い違和感を感じ出していたのです。それは教育者としての立場をテーマとしたものでした。私の導き出した答えは、子どもに教育する立場にある人間は、強烈な「夢」と明確な「経営信念」を持っているべきだと思ったのです。そこで、私は業績がある程度まで伸びた時に、当時ではまだ土壌ができ上がっていなかったフランチャイズ方式での全国展開を始めました。

旧ペガサスは再度大きく発展し、業績を上げましたが、やはりバブルの崩壊の波は、民間企業へのお金の流入を止め、講師人件費が大きく各教室に圧し掛かり、非常に苦しい経営環境が続きました。

しかし私は、再度転機が訪れたと感じました。それは先程もお話しましたが、人の手を介す「個別指導」は子どもの依頼心を増大させ、自ら物事を学び取って行こうとする力を奪う危険性を伴っていることを懸念していた私は、現在の我々の出した答えである「ティーチィング」ではない新しい子どもへのアプローチである「コーチング」への対策として当時としては全くあり得なかった、コンピュータープログラムを使った学習塾の開発を進めていたのです。しかし、時代というのは残酷です。そこから十五年間は苦しい時代が続きました。それはそうです。親御さんたちは子ども達につきっきりで教えてほしいのです。完全な「ティーチィング」の時代に「コーチング」の理念はなかなか受け入れてもらえませんでした。しかし二〇〇八年本当にたった二年前で私の考える教育は日の目を見始めました。

――では教育方針にどういう特徴があるのですか？

田中　我々の教育に関してはよくソフトプログラムに特徴があるものだと勘違いをされやすいのですが、実はそうではありません。ソフトは、子どもが「自立学習」の「自立」を得た結果として使い始める道具であり、そのソフトにはもちろん「繰り返し学習」の要素も入っていますが、それよりもっと重要と考えているのは子どもたちに「夢」を持たせる事なのです。

私たちは子どもの夢を発見するために「マインドマップ」の導入や、「夢合宿」に力を入れています。「夢合宿」では、予め子ども達が目標にしたい各会のプロ選手や社長を会場にお呼びし、仕事の意義や夢をかなえるまでにどのような苦労をしたか、厳しさ等を生の声で語ってもらいます。

そうすることによって、子どもたちは「夢（目標）」と「勉強」がつながり、勉強の重要性と真剣に向き合うようになります。子ども達の集中力は素晴らしいものです。各々夢に向かった勉強をし、「繰り返し学習」も本当の効果を発揮していきます。

また、もう一つ私たちが力を入れていることがあります。それは、二〇代の若者たちの創業支援をペガサスの教室で経営させることによって行うことです。

やはり「夢」を持つ子どもに真剣に教育ができるのは、本当に「夢」を持ってチャレンジできる若者であると思っています。その真剣勝負ともいえる空間が今のペガサスの特徴であると思います。

ペガサスの改革も3年目に入り、今年は大幅な改革に踏み切ります。昨今の世界の経済状態、情勢は非常に大きな変革の時代を迎えようとしていることは皆さんもよくご存じの通りです。世界の教育事情もしかりで、日本も長期視点、国力の観点からも遅れをとってはならないと思っております。最近の中国経済の台頭は、日本の80年代を彷彿とさせるものがあります。中国では英才教育を国家をして進めている模様で、この点でも日本もうかうかしていられる状態ではありません。

そんな折、国内においては「ゆとり教育」といわれるカリキュラムの後、実質脱ゆとりの方向に舵を切った文科省。教育現場レベルにおいて、これからいかなる結果が出てくるのか、国の行う教育はまだまだ方向性を模索しはじめた段階です。

勉強とは何であるのか。吉田松陰の掲げた「学は人たる所以を学ぶなり」「夢なき者に成功なし」のテーマこそ、新たな真の教育の方向性であると考えています。新時代の教育、子どもを指導していく私塾を創造して参りたいと考えています。

『子供たちが≪夢≫と≪希望≫をもち、将来の目標を大きく色紙に描く』